

令和5年度第1回社会教育委員会議 議事録

日 時 令和5年7月18日(火) 10時～12時

会 場 大阪府新別館南館8階 大研修室

出席者 青野委員、大谷委員、岡田委員、蔭山委員、河瀬委員、向井委員、安原委員、
吉原委員

- 議 事 (1) 議長・副議長の選出について
(2) 大阪府社会教育研究会議について
(3) 令和5年度子ども読書活動推進事業計画について
(4) この先10年を見据えた、教育コミュニティづくりの取組みの推進に向けて

<意見・質疑要旨>

◆議事(1) 議長・副議長の選出について

«概要»

大阪府社会教育委員会議規則第4条の規定により、議長及び副議長は委員の互選によって選出することを事務局から説明。議長の選出について、委員からの推薦がなかったため、事務局から岡田委員を推薦し、承認された。副議長については、岡田議長から濱元委員の推薦があり、承認された。

◆議事(2) 大阪府社会教育研究会議について

(委員)

・人材育成や世代交代は課題であり、どんな取組みをしても即効性はない。社会教育委員が関わりながら、どのように人材を発掘するか、発掘するためのノウハウを学べるような研修があれば、社会教育委員の活動というテーマにもつながる。

(委員)

・人材育成、世代交代、若者の参加をテーマとして取り上げていただきたい。
・社会教育は広義で理解することが難しいため、理解する第一歩として社会教育振興のために社会教育委員が果たす役割を取り上げるのもよい。

(委員)

・コミュニティの中で小学校の役割は大きく、校区の中で地域の方が様々な活動を行っている。祭りや体育大会など、地域の方を巻き込んだ行事についてもコロナ禍で4年間のブランクがあった。教員の働き方改革もあり、今、大きな見直しを図っているところ。その中で、地域での担い手をどうやって探していくか、探すというよりつらいとだめな時代になっている。学校や地域でも社会教育を進めていく人を育成する必要があるため、そのようなテーマがあればよい。

(委員)

・地域との連携では、高等学校の場合は部活動が関係している。部活動の地域移行に際して、その担い手をどう探していくかが問題である。

(委員)

・人材育成は喫緊の課題である。中学校の地域を見ても、同じ人がいろいろな役を担い、会議が変わってもメンバーは同じということがある。

・第2次大阪府教育振興基本計画の重点取組に、「社会や地域とつながる探究的な学習の実践」とある。様々な地域の身近な諸課題に対して、中学生としてどのようにそれを考えていくのか、中学校教育の中でも考えていく必要がある。例えば、中学生が地域のフェスティバルに参加するだけでなく、自分たちが地域の担い手として、どのような形で関わっていけるかということを育てなければと思う。

(委員)

・地域の方々の力を使って子どもを育てる一方、中学生になると地域に貢献できる年代でもある。そのような関わり方をすることで、子どもたちが次は地域を支える人材になっていく可能性があり、子どもたちを育てるといふことばかりでなく、子どもたちの力を引き出していくことが人材育成につながっていくのだろう。

(委員)

・公立幼稚園は地域に根ざし、地域のコミュニティの核になる、地域の幼児教育のセンター的役割を果たすことが求められている。子育て世代を支える体制として、安心して子育てができる環境の提供を地域で行うために幼稚園も協力できることがある。

・熱心な PTA 役員の方々が、幼稚園教育を支えてくれている。その方々が小学校の PTA 役員や地域の青少年指導員、民生委員など、地域のコミュニティの核として動いている。PTA 役員の活動を通して地域を支える存在になっていることが親育てとなり、地域や学校に貢献する喜びを味わい、最終的に地域を支える人になっていくのではないかと考える。

(委員)

・学校と地域の連携において、中心メンバーになっている方が PTA 経験者である。PTA を入り口に地域活動に参入することも一つである。

・社会貢献をしようと活動している若者や NPO はいるが、社会教育という言葉でくられると自分たちの活動とは縁がないと感じてしまう。社会教育と自分たちの活動をどうつなげていくかは大きな課題である。

(委員)

・公共図書館は地域の力がないと成り立たないが、ボランティアだけでは限界があり、頼りすぎはいけない。スキルに対して費用を払う必要がある。

・学校図書室の地域開放を進めているが、地域に依頼をするとキーパーソンが限られているため、大学生を含めた地域人材の発掘が大切である。

(委員)

- ・地域の問題を企業にも理解してもらい、企業が地域の子育てや地域活動を支援していくという意識を持ってもらうことが必要ではないか。
- ・地域貢献等に対して、もう少し組織的に動けるような仕組みを今後は考えていかざるを得ない。そのようなきっかけになるようなテーマがあれば、さらに議論ができるかを感じる。
- ・いろいろな意見があったので、事務局においてはこの辺りから探っていただきたい。

◆議事（3）令和5年度子ども読書活動推進事業計画について

(委員)

- ・コロナの影響で家にいる子どもたちが増えたが、結果として本を読まなかったということ。パソコンやスマホに負けてしまった。本をすぐ手に取れる環境が必要であり、本の普及・充実が必要である。しかし、本は高価になっており、安価に手に入れることができる場所があればよいのだが、親や子どもたちを説得するために、読書をすれば成績が上がるというようなデータを示す必要がある。はっきりしたエビデンスを示さないと、納得して本を手にとらないだろう。
- ・読書をしたあとに記入する「読書ノート」があるが、紙媒体から電子データに変更になった。しかし、低学年の子どもが自ら端末に入力するのは難しい。そのため記録量が減っている状況があるため、読書ノートはアナログな紙媒体のほうがよいと感じている。

(委員)

- ・不読率の高さは大きな課題だと感じる。ある市の図書館には子どもが大勢集まる。理由は漫画が多いから。読むことのきっかけとして、漫画も読書に含めてよいのではと感じる。
- ・また、子どもたちはイベントや「映える」ことが好き。大阪府には本が映える、おしゃれという仕掛けを考え、面白いインスタグラムで図書館の情報を発信していただくのはいかがでしょうか。

(委員)

- ・小学校で子どもの読書率を上げたいという話が出たため、地域全体で本の寄付を募り、学級文庫として置いた。すぐ手の届くところに自分たちの読める本があると子どもたちは自然と手を伸ばす。
- ・また、図書館のようにルールを作らず、誰でも借りていいし、記録もしない、いつ返してもよい、もらってもよいとした。そうすると、普段本を読まない子が読み、この本面白かったよと言って、それを他の友達に紹介するという流れが出てきた。手に取る機会を多くするという地道な努力が必要だと思う。また、ある中学校では図書室に座布団を置き、ゴロゴロできるスペースを作ると、来室する子どもが増えた。行ってみたいと感じる図書館や図書室にする工夫が必要である。

(委員)

- ・ある大学の調査で、読書量の多い子は学力が高いという結果があった。学力が高いから読書量が多い

というわけではないが、やはり読書は非常に大事である。

- ・学校の図書館には、読書センターとしての機能だけでなく、1人1台端末が配布されたため情報センターであるとか、各教科での図書館の利活用という部分での、いわゆる学習センターとしての機能が重要になってくる。
- ・中学校で本に触れる機会を増やしていくことが大切と感じており、そのためにも、本の充実が必要である。

(委員)

- ・「読む」とは何か、数値や図形を読むことも読書に入る。読むことの多様性を大人も理解し、大人が読書に興味を持たないと子どもも本を読まない。
- ・本市では、本を読まない、図書館は必要ないと言う子どもたちに集まってもらい、意見を聞いた。そうすると、読みたいけれど時間がない、本が身近にない、休み時間では読んでいる途中で止めないといけないなど、読みたいわけではないということが分かった。本が好きではない方の視点を大切に、子どもたちが本に触れる取組みを始める。
- ・図書館に「映える」スポットを作るのも、本を読むきっかけになりおもしろいのではないか。

(委員)

- ・教科書を読むことは読書に入らないのか。スマホで本を読む子どもも多いという現状で、読書とは何だろうと問い返してもいい。
- ・文字を読んで情報を得ることが大切であり、どのようにその力をつけていくかを考えることが必要である。不読率の上下に一喜一憂しなくてもよいのではないか。

◆議事(4) この先10年を見据えた教育コミュニティづくりの取組みの推進に向けて

(委員)

- ・議事(2) 大阪府社会教育研究会議と同様に、教育コミュニティづくりも人材育成やネットワークづくりが課題となっており、そこで議論したことと重なる。

(委員)

- ・コーディネーターや親学習リーダーなど、多くの方を研修の対象とすると、専門的な話ができず、内容が薄まったように感じたので、研修の参加対象者は分けて実施してほしい。
- ・取組みの対象は子どもたちであるため、子どもたちの声をもっと聞ける機会を作っていただきたい。今の子どもたちは発信もできるし、発想力も高い。声を聞いていただき、子どもたちが参画できるようなものを考えていただきたい。
- ・おおさか元気広場の企業・団体連携は、キャリア教育の入り口になるため、さらに対象企業・団体を増やしていただきたい。